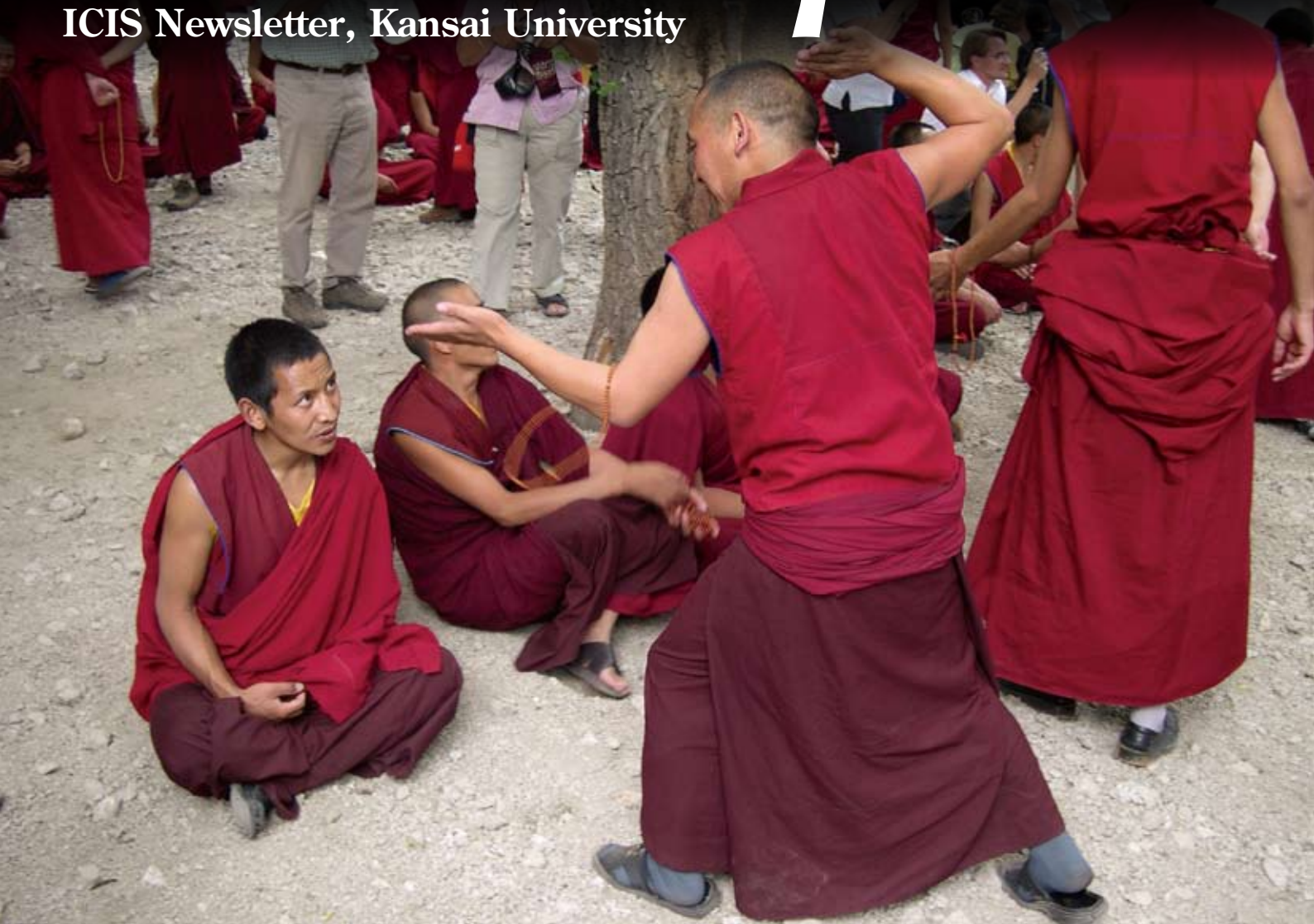


Reflection 4

ICIS Newsletter, Kansai University



Contents

第1回次世代国際学術フォーラム 境界面における文化の再生産 ——東アジアにおけるテキスト、外交、 他者イメージ、茶文化の視点から……………	2
コラム/トウモロコシ畑から眺めた文化交渉学…	5
ICIS第3回研究集会 周縁から見た中国文化……………	6
活動報告……………	8
連載コラム/食の文化交渉学 第三回 ……	11
文化交渉学専攻RA対談 ……	12
出版物紹介……………	13
お知らせ……………	14
紀要募集要項・編集後記……………	15

ICIS

文部科学省グローバルCOEプログラム
関西大学文化交渉学教育研究拠点

Institute for Cultural Interaction Studies, Kansai University



境界面における文化の再生産

——東アジアにおけるテクスト、外交、他者イメージ、茶文化の視点から

ICIS

第1回次世代国際学術フォーラム

2008年12月13-14日、関西大学において第1回次世代国際学術フォーラムが開催された。本フォーラムは、複数の専門分野を横断し、文化交渉学研究に寄与するテーマ設定で研究発表・議論を行うもので、研究の最前線を担うべき次世代が独自に企画・実行するプログラムである。今回は、東アジアにおける文化の接触領域や文化間の境界面に生じる文化的争点、文化の再生産や変容を議論すべく、外交、他者イメージ、テクスト、茶文化という四つのテーマを設定した。

<第1セッション>

近世東アジアにおける文化交渉としての外交

「17～18世紀初における琉球王国の構造変容——文化交渉の交差点として」

岡本弘道（関西大学ICIS・PD）



1609年以後、薩摩と徳川幕府の支配を受けつつ、明清中国との朝貢・冊封関係を維持した琉球王国は、18世紀初頭までにその外交・文化戦略を確立した。王国の外交や文化戦略は江戸上りや冊封使迎接等、琉球の様々なレベルの文化交渉も規定した。現在の沖縄社会に受け継がれる“琉球らしさ”はここに由来する。

1609年以後、薩摩と徳川幕府の支配を受けつつ、明清中国との朝貢・冊封関係を維持した琉球王国は、18世紀初頭までにその外交・文化戦略を確立した。王国の外交や文化戦略は江戸上りや冊封使迎接等、琉球の様々なレベルの文化交渉も規定した。現在の沖縄社会に受け継がれる“琉球らしさ”はここに由来する。

「17世紀アジア域内交易システムにおけるベトナムの位置」

ホアン・アイン・トゥアン
(ハノイ人文社会科学大学歴史学部)



17世紀前半から中葉のアジア交易におけるベトナムの地位を、対日関係を通じて示した。鄭氏政権との対抗上、広南阮氏は日本との交易関係を活用了。一方で1637年以降、VOC(オランダ東インド会社)がトンキンー日本間の絹交易に乗

り出し、一定の成果を上げた。中国人を介した関係を含め、日本がベトナムに与えた影響は大きい。

「18世紀末のアジアにおけるオランダの外交戦略・実践の比較研究」

アリシア・シュリッカー
(ライデン大学人文学部歴史研究所)



17世紀中葉、セイロン島に進出したVOCは、キャンディ王国への伝統的儀礼を受け入れて従属的に振る舞いつつ、経済的利権を確保した。1740年以降の戦争による形勢逆転を受け、儀礼を省いた外交へ移行したVOCに対し、キャンディ側がイギリス等へ接近した結果、VOCは外交儀礼の復活を余儀なくされる。アジアでの伝統的儀礼の実践が、現地における双方の力関係に左右される典型例といえる。

「コメント」

濱下武志（龍谷大学国際文化学部）



三者の報告を通じて、近世アジアにおける文化空間の重層性が示された。「中央」のみならず、「周縁」「地方」の文脈やアジア域内交易の構造から、外交、そして文化交渉を掘り起こすことは重要である。またVOCの情報管理や琉球の「文化戦略」の事例は、情報を介した文化交渉研究の重要性を示す。

<第2セッション>

文化の境界面における 自己と他者性の交渉

——ババ・チャイニーズ、台湾先住民、
雲南ムスリム移民の事例から

「インターカルチュラルリズム、帝国、国民国家 ——リム・チェン・イン家の肖像」

ニール・コール・ジン・キョン(マラヤ大学歴史学部)

リム・チェン・イン家の生活史をとおして、マレーシア・ペナン州海峡華人のアイデンティティの異種混交性を論じた。リム・チェン・インとその妻は英国で教育を受け、英国的文化を体現しながら生活した。子供達もペナンの典型的な異種混交的環境下で教育を受け、政治運動や医療分野で活躍した。各世代を通じて、植民地ペナンの異種混交的アイデンティティを見出すことができる。

「日本人に直面する ——1895-1945年間のタロコ社会における 植民地主義、近代化、伝染性肝炎」

ウミン・イテイ(ハワイ大学マノア校人類学部)

日本の植民地期(1895-1945)、台湾のタロコ社会では肝疾患が急増した。日本植民地体制が台湾の文化的・政治的生態に与えた影響、タロコ社会における伝染性肝炎の発生、日本の植民地主義の実態、原住民政策、開拓者の熱帯地域認識について考察することで、植民地体制がタロコ社会における肝炎伝染に与えた影響を論じた。



「「夷地」像の相克——上ビルマにおける 雲南ムスリム移民の憑依現象を事例として」

木村自(関西大学ICIS・PD)

ミャンマーに移住した雲南ムスリムは、中国性とイスラームの二つの基準から、憑依現象を理解しようとしている。憑依が起こる要因のひとつは、先住民族が住んでいるという、上ミャンマーの「夷地」性に求められる。一方、憑依への対処という面では、イスラームの力により、象徴化された「夷地」をコミュニティの外部へと放出している。憑依現象の言説をとおして、雲南ムスリムの他者との関係性を論じた。



「コメント」

陳志明(香港中文大学人類学系)

各発表ともに、多民族、多宗教状況、他者との関係をとおして、文化の再生産を論じている。ニール・コール発表と木村発表では、「異種混交性」が鍵概念として提示されているが、文化とは元来異種混交的であることを考えると、この概念の使用は無意味である。また、ウミン・イテイ発表では肝疾患の急増を植民地行政側の資料のみから議論しており、原住民側の声が聞こえない。



<第3セッション>

翻訳の諸相

——仏教、イスラームそしてウィキペディア

「漢文仏教文献の成立と展開」

宮嶋純子(関西大学ICIS・RA)

仏典漢訳作業は西域出身者と漢人の協力で始まったが、美しい文章表現を重視するか(「文」派)、正確な意味伝達を重視するか(「質」派)で論争が起こった。当初は「文」派が漢人、「質」派が西域僧であったが、多くの仏典が翻訳されると、漢人が訳文に「質」を求め、西域僧が「文」に傾くようになる。こうした逆転現象に翻訳における相互理解と自己変容の過程が看取できる。



「イスラーム漢籍における用語の変化について」

佐藤実(関西大学ICIS・特別研究員)

中国で漢文イスラーム文献が著述された当初は、イスラームの神と中国の「上帝」「天」概念は全く別ものとされていたが、次第に「上帝」「天」とイスラームの神は同一視され、中国の伝統的思想とイスラームの教えは同源であると主張される。この回儒同源思想は、後の中国ムスリムに広く思念された。背景には翻訳とは困難な作業ではあるが、意味は伝達可能であるという翻訳観がある。



「インターネットの中国語
—Wikipediaの中国語を中心に—」

氷野善寛 (関西大学ICIS・DAC)

Wikipediaは、英語版を発信源とし、各言語に翻訳・利用されている。そして、各地域において、類似概念を土台として、その地域独自に調整されている。中国語の場合はさらに簡体字と繁体字の違い、地域による語彙の違いも存在する。各地域において執筆された記事を比較することで、言語接触の現場をうかがうことができる。



「コメント」

堀池信夫 (筑波大学人文文化学群)

三発表は、中国文化に大きく影響した三つの外来文化（仏教・イスラーム・現代文明）に対応する。文化が他文化を受容する時、翻訳作業はその最前線に立つことになる。翻訳がなければ文化交流は不可能である。そして翻訳行為には誤解や誤読が伴うが、それにより新しい生命力と活力が生じるのである。



「ヨーロッパにおける磁器製茶器の発展
—肥前磁器製茶器からヨーロッパ製磁器のセルヴィスへ—」

櫻庭美咲 (九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター)

17世紀に磁器製茶器は東洋からヨーロッパに輸入され、王侯貴族は室内装飾やセルヴィスと呼ばれる食器セットとして、財力や趣味のアピールに利用した。18世紀にヨーロッパで磁器が発明されると、好みのデザインで製作され、喫茶習慣がヨーロッパの生活に定着した。



「中国雲南省の西南地域における茶の商品化
—清朝期の普洱・シブソンパンナーを例に—」

増田厚之 (学習院大学人文科学研究科)

雲南南部の思茅・シブソンパンナー地域の栽培茶は、明代からの漢人の雲南流入および泡茶法確立により注目される。清代に入ると普洱茶は、雲南北に輸出され、茶交易をもくろむ漢人商人の進出や清朝の介入がおき、少数民族社会との軋轢を引き起こし、やがては生態系の変化につながった。



「コメント」

角山栄 (前堺市博物館館長 和歌山大学名誉教授)

茶はアジア発の唯一の嗜好品で、日本を訪れた宣教師たちは茶飲に表れた「もてなし文化」に感動し、ヨーロッパに影響を与え、後のシノワズリーといったアジアへの憧れへとつながっていく。イギリスでは女性が茶飲と豪華な朝食をセットにしたことにも注目したい。



<第4セッション>

文化比較ならびに
文化的脈絡からみた茶

「東アジア文化比較から考えた茶をめぐる文化的脈絡」

西村昌也 (関西大学ICIS・助教)・大槻暢子 (関西大学ICIS・RA) および関西大学ICIS若手研究者グループ

東アジア諸地域には、茶飲の文化が根付いて久しい。茶文化の伝播とその画期、茶を表す言語や茶に関することわざ・故事成語、茶飲導入時の文化的反応、儀礼と宗教、女性との関わりなどの比較検討を行い、茶文化の普遍性と特殊性を考察した。比較文化研究への有効視点として、朝鮮と日本の茶飲文化の違い、女性の茶飲をめぐる中国と西欧での対応差などを論じた。



..... 総合コメント

王貞平 (シンガポール南洋理工大学人文学院)

非常に多岐にわたる報告が寄せられたが、とりわけ第1セッションの外交と文化交流についての議論は、「文化交流」の視点を通して、「外交」など既存の理論枠組みの限界と再検討の必要性を提起した。境界の流動性・重層性と脱・中心志向を起点に文化再生産についての実証研究を蓄積することは、現代世界を理解する上でも重要である。



トウモロコシ畑から眺めた文化交渉学

井上充幸(文化交渉学教育研究拠点・COE特別研究員)

甘粛省の蘭州から北西に向かい、標高3,000mの烏鞘嶺を超えると、その先には内陸性の乾燥/半乾燥気候が卓越する世界が広がる。ここは西域へ続く遙かなる道、河西回廊の入り口である。古来、河西回廊に点在するオアシス地域では、祁連山脈北麓から流れ出る河川水を利用して灌漑農業が行われてきた。荒涼とした旅路の果てに現れる豊かな緑は、昔も今も旅人の心を癒してくれる。

21世紀に入り、この地域では、従来の小麦に代わってトウモロコシの生産量が増加している。とりわけ河西回廊最大のオアシス、張掖近郊の農地では、種用トウモロコシの栽培が盛んである。種用トウモロコシとは、翌年に播種するための種を採る目的で栽培され、特殊な育成技術が必要とする換金作物である。現在、中国国内における種用トウモロコシの全需要の90%近くが、この張掖地区での生産によって賄われているようだ。

現在、中国国内では、食生活の変化やバイオエタノールの開発推進に伴い、トウモロコシの需要が急増しているため、近い将来、輸出国から輸入国に転ずる可能性が高いという。そうなれば、世界最大のトウモロコシ輸入国である日本にも、さらなる穀物価格の高騰をはじめとする深刻な影響が及ぶであろう。張掖における農業の未来は、遠く離れた日本経済の今後の行方にも、大きく関わっている

のである。

歴史の上からも、トウモロコシと河西回廊との関わりは深い。

トウモロコシが中国西北部に齎されたのは、明の嘉靖21年(1542)刊『陝西通志』にその名が見えることから、遅くともこの頃であったと考えられる。1492年のいわゆる新大陸“発見”から僅か50年後のことであり、驚くべき伝達速度といえよう。そのネーミングも様々で、“番麦”“西天麦”“玉蜀黍”“御麦”“玉麦”など、様々な呼び方がなされた。万暦44年(1616)刊『肅鎮華夷志』には“回回大麦”とあり、「近年“西夷”が持ち込んで栽培を始めた」と記されている。この他、嘉靖年間に出版された広西・河南・江蘇・雲南の地方志にもトウモロコシに関する記事があり、新疆では、1550年頃にメッカ巡礼のムスリムがトウモロコシを持ち帰ったという。おそらくトウモロコシは、ムスリムの手によって、陸路あるいは海路を通じて西域から伝来し、中国各地に伝播したのであろう。

続く清の時代に、トウモロコシは中国北方の乾燥地帯や山間部に広く普及し、従来の高粱や黍と急速に置換されていった。トウモロコシの導入が、その栽培の容易さ・多収性と相俟って、18世紀における人口爆発を支える大きな要因となったことは、つとに指摘されている。

今も昔も、トウモロコシはグローバルな規模で人々の暮らしを変え、歴史を動かし続けている。河西回廊は“トウモロコシの道”でもあるといえよう。

(写真：祁連山脈の麓、酒泉南郊のトウモロコシ畑)



『本草綱目』より
玉蜀黍図



ICIS 第3回研究集会 周縁から見た中国文化

2009年1月24日、関西大学以文館4階セミナースペースにおいて、第3回研究集会「周縁から見た中国文化」が開催され、COE客員教授の平野健一郎氏による特別講演の後、ICIS各研究班からの成果が報告され、活発な議論がなされた。報告内容は次の通りである。

第1部 特別講演

国際文化交渉論の現在

平野健一郎（関西大学 ICIS COE 客員教授）

平野氏は満洲研究を出発点として、国際関係論の研究を行ってきたが、米国留学中に西洋思想を中国語に翻訳した嚴復に関するBIシュウォルツの研究に出会い、その著書『中国の近代化と知識



人一嚴復と西洋』を訳出した。訳出後、日本では嚴復に関する研究が増加しており、関心の高まりを表している。また、西洋と中国の間で思索を行い、近代や伝統と格闘を行った嚴復の研究を通じて、文化の捉え方やその境界に関心をもつようになった。「国際文化論」は文化変容論と文化接触論を参考にした文化触変論に基づいて、国際関係論を文化的に理解しようとするものである。現代において国際文化交渉は多量化、多様化、高速化の途にあり、さらにその交渉の主体が多層化、大衆化しており、より個人レベルでの考察が必要であろう。

第2部 北東アジア班

日本中世における禅僧の談義とその影響

原田正俊（関西大学 ICIS）

日本の中世においては、天台僧や禅僧が日本と中国・朝鮮半島を往来し、鎌倉時代後期には渡来僧が多数、日本を訪れた。こうした交流のなかで、京都・鎌倉の五山とその塔頭には膨大な将来典籍が蓄積された。とくに東福寺において円爾が将来した典籍は大部であり、禅籍のみならず最新の儒教典籍など多様な書物をみることができる。このような典籍をもとに、大陸からの知識の体系は、説法や談義をとおして、日本社会のなかに展開されていった。14世紀の禅僧義堂周信は、足利基氏と関東公方周辺の要人に、さらに京都においては足利義満をはじめ公武の上層に大きな影響を与えた。こうした活動により、禅宗を中心とする中国仏教・社会の情報が、日本社会に浸透していった。禅思想は日本社会に広く受容され、とくに「能」のなかでは、禅語が多用され、禅の見解が重要な場面で提示されている。また、禅は女性観にも変化を与えた。こうした談義の影響によって、室町時代の人々が、大陸文化、とりわけ禅宗への知識を共有していくこととなった。



第3部 沿海アジア班

長崎唐寺の媽祖堂と祭神について

二階堂善弘（関西大学 ICIS）



宗教信仰の観点から見ると、「中心」と「周縁」の関係は政治的中心とは必ずしも一致しない。以下、長崎唐寺における媽祖及びその周辺の神々への信仰を通じて、この問題を考察する。例えば、「福州寺」とも呼ばれた崇

福寺には当初「五帝堂」なる殿宇があり、また「九鯉湖仙」なる神が祀られていたようであるが、いずれも閩東（福州周辺）の信仰文化圏との関連性を強く示唆する。また、「漳州寺」と称された福濟寺、「南京寺」と称された興福寺で祀られた神々も、それぞれの地域性と連動すると見られる。媽祖信仰において、その祖廟のある福建の湄州島がその中心となることは言うまでもない。しかし、長崎唐寺における媽祖信仰をその「周縁」と捉えた時、中国東南沿岸地域の地域信仰の有り様に新たな枠組みを提示しうる。以上の点を踏まえ、今後沖縄や馬祖列島など他の「周縁」からの多角的な検討が持つ可能性が提示された。

第4部 内陸アジア班

中国西北における中国支配と中国文化

藤田高夫（関西大学 ICIS）

中国西北部の「河西地方」と称される地域における中国とのかかわりを考察し、当該地域の「中国文化」への位置づけを検討する。おもに秦代、前漢および後漢時期の「河西」における支配構造、ならびに農業の発展を中心に論述がなされた。紀元前3世紀末頃、河西地方は月氏を駆逐した匈奴に支配されていたが、前漢期になると、河西地方は匈奴と戦っていた漢の支配下に入ることとなる。漢の河西支配は意図されたものでなく、軍事的観点からのやむを得ない選択であったが、屯田・徙民により

食糧自給が可能な地域となった。その後、王莽末期の竇融政権は、中原王朝と一時連絡が絶たれたが、中原へのルートが回復すると自ら後漢の支配下に復帰した。漢代以降、河西地方は中原王朝とのつながりが何回も途絶えたにもかかわらず、この地域の歴史を通観すると、文化的にはあくまでも濃厚な中国文化圏に属し、自ら離脱することはなかったという。



第5部 アジア域外班

周縁と他者・外部

小田淑子（関西大学 ICIS）

「周縁」概念をより精緻にするための試みが提示された。まず周縁と呼ばれる存在には、研究主体を指す場合、研究対象を指す場合、あるいは研究方法である場合などがあり、一様ではない。「周縁からのアプローチ」を意識する上で、それらの相違を包含していくことが肝要である。そのうえで、近代ヨーロッパで成立した東洋学という、他者によってなされたアジア研究を検討することの重要性が指摘された。さらに周縁に類似した概念として他者・外部をとりあげ、両者を中心との関係、そして中心—周縁構造全体との関係により区別する。周縁とは中心との関係を維持するものであり、他者とは中心—周縁構造にとっての他者性・外部であることを強く意識するものである。だがそれらの差異は決定的なものではない。今後は具体例に沿いつつ、周縁と他者とのかかわりについて考察をすすめる必要がある。





活動報告

《 創生部会 》

2008年11月から2009年4月末日までに開催された創生部会は下記のとおりである。

第14回創生部会：2008年11月28日

藤田高夫 (ICIS サブリーダー)

「研究拠点としてのICISの今後 —研究運営のためのメモ」

今後のシンポジウム・研究集会について議論がなされた。本プロジェクトの根幹概念である「文化交渉」「文化交渉学」と「周縁」に関する議論をめぐっては、前者に対する認識や研究対象・テーマを共有しながら各メンバーの持つ多様性を活かしていく方向性が確認され、また後者に対する概念をめぐっても、さらに議論を深化していく必要性が提示された。

第15回創生部会：2008年12月19日

藤田高夫 (ICISサブリーダー)、小田淑子 (ICIS)

「「周縁」と「周縁性」をめぐって」

周縁アプローチに関する院生・研究員・教員へのアンケート調査の結果をふまえ、藤田高夫氏と小田淑子氏の提言がなされた。周縁とは何かについては「地域性」という回答が多く、階層差、信仰、研究方法という答えは少数にとどまった。この結果を受け、「周縁」観や周縁研究の目的を議論する場が必要であることが指摘された。小田氏は、宗教学の事例から周縁理解の多様性を指摘し、さらに欧米の東アジア研究やオリエンタリズム・ポストコロニアリズムの議論を視野に入れていく必要性を提起した。

第16回創生部会：2009年2月20日

平野健一郎 (COE客員教授)

「国際文化交渉論の現在(2) —「国際社会」という概念の受容と変容」

本発表は、近現代の日本における「国際社会」という言葉及びその概念の成立と変容について、国際文化交渉研究の一類型である概念史研究の手法を用いて



論じたものである。まず、「国際社会」という語について「国際」と「社会」それぞれの成立事情を取り上げた。「international」の訳語として用いられた「各国交際」に由来する「国際」は次第に「国と国との間の」を意味する語素としての地位を獲得する。“society”の新訳語である「社会」と結びついて「国際社会」なる語が形成された。後半では、「国際社会」という語とその実態の変容について取り上げた。「国際社会」の観念は、当時のヨーロッパ社会の実態の反映である<諸国家社会 (society of states)>から<諸国民社会 (society of nations)>へと変化した。

王敏 (COE 客員教授)

「アジア交渉史の試み—万葉・神農・大阪」

本発表は万葉集を一つの例として、アジア交渉史のあり方を模索したものである。

万葉集の中には日中間の文化交渉の痕跡が残されている。例えば松竹梅の組み合わせは遣唐使・遣隋使の影響

がある。さらには日中間の比較として、梅に何の花、あるいは何の鳥を組み合わせるか、また、中国の神・神農が日本でどれほど生き残っているかを考察した。

また、2003年中国で起こった日本人留学生の事件の背景を追うことにより、現代における文化接触をスムーズにするための一つの教訓と経験とならないか、といった日中間の相互理解としての日本研究のあり方を示した。

第17回創生部会：2009年3月16日

参加者全員による自由討論

「文化交渉学構築の現状と課題」

これまでの本プロジェクトの成果と実績を踏まえ、文化交渉学構築に関わる現状認識および今後の課題・方向性を共有するために、参加者全員による自由討論が行われた。冒頭に抛点リーダーの陶徳民教授から提案がなされ、それを受けて、今後の研究プロジェクトの中心課題について忌憚のない議論が繰り広げられた。多岐にわたる論点が出され、メンバーが共有できる研究の場を改めて設定すること、及び文化交渉学自体の理論的構築を進めていくことなどが提起された。

第18回創生部会：2009年3月24日

王敏 (COE客員教授)

「黄瀛—東アジア文化交渉の一事例」

四川外国語学院にて黄瀛に指導を受けた王敏氏により、主に黄瀛の足跡をたどる内容の発表が行なわれた。黄瀛は中国人の父親が亡くなり、幼少時日本人の母親とともに中国から日本へ来た。やがて混血の悲哀を知り、詩を作り出すようになる。のちに中国へ行き国民党軍人となり、共産党軍に捕らえられ入獄する。しかし黄瀛の詩や交友に思想の偏りは見られなかった。氏はこうした彼の生涯を日中交渉の視点から捉え、また混血であることのアイデンティティのあり様を論じた。



第19回創生部会：2009年4月24日

井上充幸 (COE特別研究員)

「黒河中流域における地下式灌漑水路開発の歴史」

祁連山脈北麓の扇状地には、約600年前から地下式灌漑水路が建設され、現在に至るまで継続利用されている。本報告では、東西文化交渉・融合の一つの事例として、その歴史的経緯を述べるとともに、中国西北の乾燥/半乾燥地域における水利用のあり方、さらに中央アジアからカレズ建設の技術が導入された可能性について考察した。



黄蘊 (COE-PD)

「マレーシアにおける華人民間教派の現在—いくつかの展開方向」

マレーシアでは近代中国に起源をもつ華人民間教派ないし民間宗教結社が複数存在し、「伝統中国」的な宗教世界観を部分的にしる維持しながら、様々な展開をみせてきている。本報告では、多民族国家マレーシアにおいて、こうした民間教派はどのような展開を遂げているのか、その存在と活動にどのような意義があり、そこからどのような社会的現実が読み取れるのかについて考察を行った。そこから多民族社会という社会環境、伝統と近代といった複数の要素が絡み合う文化交渉の過程の一部が垣間見られ、またそれらについての更なる考察が今後の課題であることが確認された。



《 海外活動報告 》

(2008年11月から2009年4月)

海外学会発表

陶徳民 (ICISリーダー)

- 2008年12月16日、華東師範大学シンポジウム「全球視野中的近代中日関係研究」における研究発表。
- 2008年12月19日、復旦大学国際シンポジウム「跨越空間的文化—十六至十九世紀中外文化的相遇與調適」における研究発表。
- 2009年2月4日、プリンストン大学における研究発表。
- 2009年2月11日、ジョンズ=ホプキンズ大学における研究発表。

内田慶市 (ICISサブリーダー)

- 2008年11月7日、北京大学「第4回北京論壇」における研究発表。
- 2008年12月17日、復旦大学国際シンポジウム「跨越空間的文化」における研究発表。

沈国威 (ICIS事業推進担当者)

- 2008年12月18日、復旦大学国際シンポジウム「跨越空間的文化」における研究発表。

増田周子 (ICIS事業推進担当者)

- 2008年11月6日、台湾国立海洋大学「2008年海洋文化国際学術研討会」における研究発表。

松浦章 (ICIS事業推進担当者)

- 2008年11月25日、泉州「海上交通與伊斯蘭文化」国際学術研討会における研究発表。
- 2008年12月18日、復旦大学国際シンポジウム「跨越空間的文化」における研究発表。

西村昌也 (COE助教)

- 2008年11月11日、ハノイ国家大学ベトナム科学研究開発センターにおける研究発表。
- 2008年11月23日、ベトナム社会科学院「タンロン遺跡国際会議」における研究発表。

篠原啓方 (COE特別研究員)

- 2008年11月7日、高麗大学校学術会議における研究発表。

井上充幸 (COE特別研究員)

- 2009年4月28日、ドイツ「IHDP Open Meeting 2009」における研究発表。

木村自 (COE-PD)

- 2008年11月26日、泉州「海上交通與伊斯蘭文化」国

際学術研討会における研究発表。

孫青 (COE-PD)

- 2008年11月29日、中山大学「第二届知識與制度體系轉型會議」における研究発表。

三宅美穂 (COE-RA)

- 2009年3月25日、北京外国語大学「中日研究生漢語漢文化国際論壇」における研究発表。

海外調査

二階堂善弘 (ICIS事業推進担当者)

- 2008年12月26日～2009年1月2日、中国福建省北部寺廟調査。

野間晴雄 (ICIS事業推進担当者)

- 2009年1月16日～1月23日、イギリスにおけるプラントハンターの収集標本及び資料の調査。
- 2009年4月17日～4月21日、ベトナム・フエにおける天后宮の調査、及びフィールドワーク実習事前調査。

原田正俊 (ICIS事業推進担当者)

- 2009年2月26日～3月2日、中国河南省寺院・遺跡調査。

熊野建 (ICIS事業推進担当者)

- 2009年2月15日～2月24日、フィリピン共和国イフガオ州バナウエ町とハパオ村における資料収集。

西村昌也 (COE助教)

- 2009年4月15日～4月24日、ベトナム・フエにおける天后宮の調査、及びフィールドワーク実習事前調査。

篠原啓方 (COE特別研究員)

- 2009年4月16日～4月22日、ベトナム・フエにおける天后宮の調査、及びフィールドワーク実習事前調査。
- 2009年4月28日～5月10日、韓国における碑石・遺跡の現地調査。

岡本弘道 (COE-PD)

- 2009年3月3日～3月13日、タイにおける歴史的港市の史跡巡検。

木村自 (COE-PD)

- 2009年2月4日～2月12日、ミャンマー西南部ミャウンミャにおける華僑の動態調査。

Nguyen Thi Ha Thanh (COE-RA)

- 2009年2月2日～3月31日、ベトナム・フエの歴史地理学的調査、及び資料収集。



第三回

ルーシャン

乳扇物語—離散する雲南人と国境を越える食

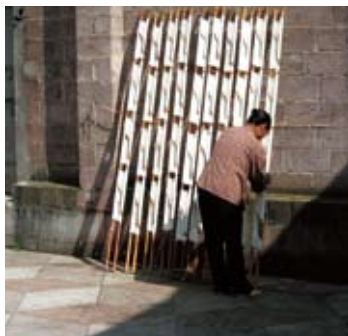
木村 自 (大阪大学人間科学研究科・助教)

ちょうおばさん
張大媽の話には、「乳扇」がいつも登場する。国共内戦いまだ止まぬ1946年、張大媽は戦火を逃れて雲南省を離れ、国境を越えてミャンマー領へ渡った。そして、中緬国境付近の片田舎「タンヤン」で結婚した。夫は、キャラバン交易でミャンマー滞在中に、雲南省で国共内戦が始まったため帰国を断念していた。夫がムスリムであったため、張大媽もイスラームに入信した。彼女は夫とともにタンヤンに食堂を開いて、ミルクティーやコーヒー、中国菓子を売って生活した。自分の家族だけではなく、戦火を逃れて中国を離れた若人を店で働かせ、彼らの面倒をも見ていた。店では乳扇がよく売れた。



【乳扇を作る人々】

乳扇は乳製品の一つである。絞らたての牛乳に熱を加え、彼らが「酸奶」と呼ぶ透明な乳成分を加えて混ぜると、牛乳は次第に凝固し、餅のような塊になる。それを薄く延ばして竿に巻きつけ、天日で乾燥させると乳扇が出来上がる。ミャンマーの片田舎タンヤンで、張大媽は乳扇を作り続けた。毎朝4時頃には起床し、イスラームの早朝の礼拝を済ませると、乳扇作りに取りかかる。裏



【乳扇を乾燥させる】

の山には300頭の乳牛が放牧されていた。インド系の使用人が毎朝新鮮な牛乳を搾ってくる。それをいくつもの鍋に入れて火を加え、焦がさないようにゆっくりかき混ぜ乳扇を作る。

1960年代以降、ミャンマーでは政治・経済・治安面で大きな混乱が生じる。排華運動が起こり、廃貨政策が採られ（高額紙幣が突然流通停止になったのだ）、麻薬王クンサーの武装勢力が生活を脅かすようになると、張大媽ら一家はミャンマーからタイ北部に逃れた。張大媽夫婦は、タイ北部でも裸一貫で雑貨屋を始め、乳扇を売って生計を立てた。張大媽夫婦には8人の子どもがいる。子供たち8人を、乳扇で育てたのだ。張大媽の話に乳扇がいつも登場するのは、こうした訳である。

乳扇は雲南人の冠婚葬祭の席には欠かせない。日常食として食べないこともないものの、それなりの値段がするため、もっぱら結婚式や葬式、祝祭や家族・親族のお祝い、客人を迎えるときに出される。今日、雲南の観光地などでは、串焼きにした「焼き」乳扇なども見られるが、一般にテーブルに出されるのは、揚げた乳扇である。ミャンマーでも、タイでも、台湾でも、雲南人のコミュニティでは、揚げた乳扇が冠婚葬祭のテーブルに上る。



【乳扇は普通揚げて食べる】

夫が他界した1991年、張大媽は先に移住していた子どもたちを頼って台湾に再度移住し、現在は台湾に居住している。台湾の雲南人コミュニティには乳扇を作る人がいない。新鮮な牛乳が手に入りにくいし、乳扇作りの技術も伝承されていないからだ。それでも、乳扇はタイやミャンマーから持ち込まれ、雲南人の冠婚葬祭の席で給される。雲南人が移住しコミュニティを構築するに伴い、乳扇も国境を越えて移動する。四つの地域を駆け抜けた張大媽と乳扇の物語であった。



文化交渉学専攻RA対談 「文化交渉学における語学の意味」

対談者：鄭 潔西 (D2) グルン・ロシャン (D1) 田中 梓都美 (D1)

文化交渉学専攻では人材養成プログラムとして、国際的発信力を養うために複数言語の習得を必須とし、英語、中国語、朝鮮語、日本語の少人数クラスを開設している。このことは、国際的に活躍できる研究者を養成するのに有益であると考えられるが、その一方で語学のために専門的研究を行う時間が割かれ、研究が疎かになるということも懸念される。

そこで、実際に語学の授業を受講している学生に意見を聞くべく、対談の場を設けた。



【田中 梓都美氏】

田中：お二人は以前何を研究していましたか？

鄭：大学の専攻は歴史学部歴史学科地方志専攻ですが、大学時代日本に興味を持ったことから修士課程で日中交渉史にテーマを変えました。

ロシャン：私の専攻は、ネパールの歴史・文化・考古学でしたが、先進国である日本の経済を学べば、ネパールの経済発展を考えるヒントになると考え、修士課程では日本の経済を研究しました。ただ、修士課程中は自分の語学力を活かす機会がほとんどありませんでした。そこで、自分の英語力と日本語力を最大限活かせる場所だと聞き、文化交渉学専攻への進学を決意しました。

田中：ロシャンさんは進学後、実際に英語、日本語の授業を受けていますよね。どのような授業内容ですか？

ロシャン：日本語の授業は会話ではなく書くという点に重点が置かれており、レポートや論文の書き方を学んでいます。英語は欧文資料を読み、そのテーマに対する討

論が中心の授業です。どちらにも共通する点は、アカデミックな内容に特化したものであるということです。

田中：お二人の母語と現在までの習得言語を教えてください。

鄭：私の母語は故郷浙江省の方言である仙居話で、他に普通話(共通語)と英語、日本語が話せます。

ロシャン：私はネパール語と日本語の他に、ヒンドゥー語と英語が話せます。

論が中心の授業です。どちらにも共通する点は、アカデミックな内容に特化したものであるということです。

田中：ロシャンさんは英語、日本語ともすでにかかなりの力があるように思うのですが、それでも研究の時間を割いてまで授業を受ける理由はどのような点にあるのでしょうか？

ロシャン：日本語は、確かに日常会話では問題ありませんが、書く能力はまだまだ足りません。私たちのような非漢字文化圏の人間にとって、日本語の読み書きは難しいです。私は論文の書き方を学ぶためこの授業を受けています。論文、学会、新聞など、どこにでも発表できるものを書けるようにしたい。

英語に関しては、読み書きにはあまり問題ありませんが、今の環境では英語を使う機会が非常に少ないため、会話の能力を維持、発展させられるよう授業を受けています。

田中：鄭さんは去年、英語と日本語を受講されていましたが、今年、受講しなかったのはどうしてですか？また、現在は韓国語を受講していると聞きましたが、それを負担と感じたことはありませんか？

鄭：確かに英語は必要ですが、私の研究は中国、韓国、



【グルン・ロシャン氏】

日本、琉球が対象なので、韓国語と日本語の論文や文献を読むことに重点を置いています。私の最終目標は、世界で活躍できる研究者になることなので、そのために必要な韓国語の授業を負担と感じたことはありません。日本語と英語は論文の書き方を含め、自分が研究を進める上で必要となる能力は去年の授業で身につけられたので、今年度は授業を受ける必要はないと考えています。

田中：英語が出来るのに他の言語を学習する必要がありますか？

鄭：今は読み書きに重点を置いていますが、今後はもっと多くの学者と交流したいと考えています。その際、研究者全員が英語を話せるとは限りません。また、通訳、翻訳者を介せば、自分の主張が正しく伝わらない可能性がありますし、翻訳者の主観が入ってしまうこともあるでしょう。

ロシャン：私も将来世界で活躍できる研究者を目指しているので、語学は切り離すことはできません。私は討論や発表などといった、コミュニケーション、情報発信手段としての語学を重視しています。その点で今の授業は、

発表など、研究活動に直結した、しかもプロフェッショナルによる質の高いものなので、非常に素晴らしいと思います。

鄭：私も同感です。この拠点は非常に優れた環境を与えてくれており、研究活動に直結した語学カリキュラムによって、研究の幅が広がったと実感しています。

田中：そうですね。私もこの専攻の一員であり、語学は研究の一部だと思っているので、今与えられている環境に心から感謝しています。今後さらに研究を深め、それを公表したり他の研究者と交流したりする際に多様な言語スキルを用いて交流すること、それ自体が「文化交渉学」なのかもしれませんね。



【鄭 潔西氏】

❖ 出版物紹介

* 二階堂善弘／著

『**明清期における武神と神仙の発展**』

(関西大学出版部・2009年2月・207頁)

* 松浦章／著

『**清代内河水運史の研究**』

(関西大学出版部・2009年2月・385, 図版14頁)

* 松浦章／著

『**清代帆船東亜航運与中国海商海盜研究**』

(上海辞書出版社・2009年3月・337頁)

* 陶徳民・姜克實・見城悌治・桐原健真／編

『**東アジアにおける公益思想の変容**

——近世から近代へ』

(日本経済評論社・2009年3月・296頁)

* 陶徳民・姜克實・見城悌治・桐原健真／編

『**近代東アジアの経済倫理とその実践**

——洪沢栄一と張謇を中心に』

(日本経済評論社・2009年3月・278頁)

* 吾妻重二／責任編集

『**東アジア文化交渉研究**』

別冊5 『**朱子語類 礼関係部分訳注1**』

(関西大学文化交渉学教育研究拠点・2009年3月・122頁)

* 吾妻重二／著

『**宋代思想の研究**

——儒教・道教・仏教をめぐる考察』

(関西大学出版部・2009年3月・429, 12頁)

* 窪田順平・承志・井上充幸／編

『**イリ河流域歴史地理論集**

——ユーラシア深奥部からの眺め——』

(松香堂・2009年3月・315頁)

* 野間晴雄／著

『**低地の歴史生態システム**

——日本の比較稲作社会論——』

(関西大学出版部・2009年3月・483頁)

❖ 学術交流協定について

平成21年4月19日、ベトナム・フエ科学大学歴史学部（The Faculty of History, Hue University of Sciences）と学術交流協定を締結し、文化交流学に関するさまざまなプログラムを協力して推進することを確認した。

昨年本拠点が周縁プロジェクトの一環として実施したフエ旧外港集落のフィールドワークでは、共同調査を行うなど、これまでの研究交流がここに学術交流協定の締結として結実した。

（写真：グエン・クワン・チュン・ティエン学部長と野間晴雄教授）



❖ 第2回次世代国際学術フォーラムのご案内

関西大学文化交渉学教育研究拠点では、2009年12月12日（土）、13日（日）の両日、第2回次世代国際学術フォーラムを開催いたします。本フォーラムの日時、開催場所および開催趣旨は下記のとおりです。報告内容等に関する詳細は、ホームページ（<http://www.icis.kansai-u.ac.jp/>）をご覧ください。

文化交渉による変容の諸相

—自然信仰、エスニック要素、宗教実践、言語概念と教育を手がかりに—

日時：2009年12月12日（土）～13日（日）
開催場所：関西大学

【フォーラム開催趣旨】

昨年の第1回フォーラム「境界面における文化の再生産」では、文化の交渉、つまり相互作用の「場」を再発見し、そこで何が行われているのかを見いだすことを目指した。「文化交渉とは、従来固定的に捉えてきた国家間・民族間にとどまらず、人の心、営み、そして言葉の中にも存在する」。様々な議論の中からこの共通認識を得たことは、我々にとってひとつの成果であった。

そこで第2回フォーラムでは、文化交渉の「場」から「結果」へと目を向ける。文化交渉によって何が起こり、変化し、創られたのか、そしてその変容をもたらした背景は何か。手がかりの一例として、自然と人の関係が生み出す信仰の変容、諸エスニック要素の融合から生まれる宗教実践のあり方、異文化間を往来し解釈される言語と概念、言語教育の変容などを挙げる。交渉からくる変容の多様性、文化の創造について、活発な、そして示唆に富む議論を交わしたい。

❖ 人事異動

2009年2月1日から2009年3月31日まで、王敏氏（法政大学国際日本学研究所教授）をCOE客員教授として招聘した。2009年3月31日を以て、佐藤実氏がCOE特別研究員を離任、大妻女子大学に転出した。

2009年3月31日を以て、于臣氏がCOE-PDを離任、横浜国立大学に転出した。

2009年4月1日を以て、井上充幸氏がCOE特別研究員に着任した。黄蘊氏がCOE-PDに着任した。稲垣智恵氏、川端歩氏、Gurung Roshan氏、田中梓都美氏、松井真希子氏以上5名がCOE-RAに着任した。

2009年4月14日を以て、海暁芳氏、董科氏がCOE-RAに着任した。

2009年5月1日を以て、馮赫陽氏がCOE-RAに着任した。

2009年5月1日から2009年6月30日まで、黄俊傑氏（国立台湾大学歴史系特聘教授・人文社会高等研究院院長）をCOE客員教授として招聘した。

2009年5月15日を以て、木村自氏がCOE-PDを離任、大阪大学に転出した。

グローバルCOEプログラム
「関西大学文化交渉学教育研究拠点 (ICIS)」
紀要原稿募集のお知らせ

関西大学文化交渉学教育研究拠点では、紀要『東アジア文化交渉研究』(Journal of East Asian Cultural Interaction Studies)の原稿を、下記の要領で募集しております。応募いただいた原稿は、編集委員の査読により、掲載の可否を決定いたします。

- (1) 原稿
東アジアの文化交渉にかかわる論考、研究ノート、その他
- (2) 使用言語
日本語：20,000字程度
中国語：12,000字程度
英語：4,000語程度
- (3) 注意事項
 - (a) 英語による要旨を、150語程度で添付してください。
 - (b) 提出はワード文書でお願いいたします。
 - (c) 注は脚注方式でお願いいたします。
 - (d) 文献についても参照文献リストは付けず、脚注に収めてください。
 - (e) 図表がある場合にも、なるべく上記字数に収めてください。
- (4) 投稿原稿の二次利用としての電子化・公開につきましては、紀要掲載時点で執筆者が本拠点に許諾したものといたします。
- (5) 提出締切り等、詳しくは下記の連絡先にお問い合わせください。

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
関西大学文化交渉学教育研究拠点
『東アジア文化交渉研究』編集委員会
TEL : 06-6368-0256
E-Mail : icis@jm.kansai-u.ac.jp

編集後記

対話はコミュニケーションの基本であり、同時に知の追求の起点でもある。それは、唯一絶対の真理を探り当てる手段というより、むしろ双方の差異・多様性そして矛盾を浮き彫りにしていく過程である。そこには予定調和的な、一貫した論理にはないダイナミズムがある。無論、論理そのものの洗練性・一貫性は大切である。しかし自らを含めた後続に対する開放性を維持し、それらによる不断の問いかけを構造的に許容することによって、人類の叡智は培われてきたのである。「文化交渉学」にはそのダイナミズムをさらに先鋭化していく手段となしてほしいと願う。

今回新たに立ち上げた企画として、ICISの文化交渉学専攻RA諸氏による「対談」がある。実際の対談はもちろん、テーマの選定、その内容の編集など、あらゆる場面で「対話」を積み重ねつつ書き上げられたものである。自発的な企画立案の中で対談という形式が選択されたことは、決して偶然ではない。内容にはなお未熟な部分も残るが、今後の「のびしろ」として温かく見守っていただきたい。

(担当：岡本弘道)

表紙写真について

チベットの聖都ラサの郊外にあるセラ寺(色拉寺)は、1419年に創建されたゲルク派(黄帽派)の古刹であり、我が国では、かの河口慧海が修行した寺としても知られる。表紙の写真は、2004年8月に、この寺の中庭で行われていた禅問答の光景である。

菩提樹の根元に座った師が鋭く問いを發すると、弟子は即座に両手を大きく振りかぶって打ち鳴らし、裂帛の気合とともに大音声で答えを返す。僧侶たちは一対一で、あるいは四・五人でグループを組み、庭の至る所で延々と問答を続ける。チベット語を解せぬ者にはその内容は分からぬものの、その気迫はひしひしと伝わってくる。

このような形式の禅問答は、福井県の永平寺でも行われている。そこでもやはり、師と弟子とが寺の一室で対坐し、互いに挑みかからんばかりの勢いで、丁々発止と激しい問答を繰り返すのである。

チベット仏教と日本の禅宗との間には、確かに多くの相違点が存在する。しかしながら、両者は同じ修行を通じて、師から弟子へと脈々と法灯を受け継いでいる。そんな思いを見る者に抱かせる光景である。



【撮影：井上充幸】



Reflection 4

ICIS Newsletter, Kansai University

発行日.. 2009年(平成21年)7月31日
発行.. 関西大学文化交渉学教育研究拠点

大阪府吹田市山手町3-3-35

〒564-8680 / TEL 06-69368066

E-Mail icis@jmkansai-u.ac.jp / URL <http://www.icis.kansai-u.ac.jp/>

関西大学文化交渉学教育研究拠点

ICIS

